第2回
ヨコハマ都市デザインフォーラム
YOKOHAMA URBAN DESIGN FORUM

地域会議

都筑区［港北ニュータウン地区］

報告集

Cover Designed for Yokohama Urban Design Forum by NDC Graphics 1999

はじめに

地区のまちづくりに，市民が持続的に関わることを可能にするような仕組みや仕掛けをいかにつくり出すのかは，常に課題であり，これをいかに発展させていくのかが，今，ますます重要になってきています。第２回ヨコハマ都市デザインフォーラム都筑区地域会議においては，成熟途上の港北ニュータウンを舞台に「郊外部の持続的街づくりを考える」というテーマで，このような仕組みや仕掛けについて議論がなされました。

このたび「都筑区地域会議 報告集」が完成しました。会議に参加，ご協力いただきました方々には深く感謝いたします。本報告書が，港北ニュータウンへの理解を深め，今後の活動の中でご活用いただければ誠に幸いです

なお，本報告集は，地域会議に先立って都筑区役所主催で行われた３回連続講演会「プレ・第２回ヨコハマ都市デザインフォーラム　この街はこうしてできた」の概要報告とあわせて作成されています。

□プレ・第２回ヨコハマ都市デザインフォーラム　この街はこうしてできた
～３回連続講演会～港北ニュータウン事業のあゆみ～

第１回　平成 10 年 10 月 20 日（火）

港北ニュータウン事業の概要　松﨑宏興（横浜市都市計画局港北ニュータウン部長）

第２回　平成 10 年 11 月 4 日（水）

グリーンマトリックスの理論と実践　山本眞三（住都公団街づくり推進室調査役）

第３回　平成 10 年 11 月 17 日（火）

港北ニュータウン事業における市民参加　港北ニュータウン研究会

□第２回ヨコハマ都市デザインフォーラム

地域会議・都筑区「港北ニュータウン地区」

・現地視察

・地域会議

基調講演　成熟期のニュータウン　高見沢実（横浜国立大学助教授）

港北ニュータウンの生活者意識　岩村和夫（武蔵工業大学教授）

・市民活動報告　A.タウンセンター　B.グリーンマトリックス　C.コミュニティー

・グループ討議

・総括討議

閉会セッション

目次

1　プレ講演会・・・・・・・・・・・・・・　1～　5

（平成10年10月20日，11月4日，11月17日　都筑区役所）

2　都筑区地域会議　（平成10年11月22日　武蔵工業大学）

現場視察・・・・・・・・・・・・・・　6

基調講演・・・・・・・・・・・・・・　7～　8

市民活動報告・・・・・・・・・・・・　9～11

グループ別討議・・・・・・・・・・・12～17

討議結果報告・・・・・・・・・・・・18～20

コメンテーターによる総括・・・・21～22

アンケート・・・・・・・・・・・・・23

3　閉会セッション・・・・・・・・・・・24

（平成10年11月23日　パシフィコ横浜）

4　写真・・・・・・・・・・・・・・・・・25～26

＊なお本報告書は，都筑区地域会議事務局の責任で編集しました。

プレ講演会（第１回）

港北ニュータウン事業の概要（港北ニュータウン開発計画と現状）

松﨑　宏興（横浜市都市計画局港北ニュータウン部長）

１　港北ニュータウンの現況概要

港北ニュータウンは，都筑区の面積の約４７％，人口は約６７％になっています。

開発状況を見ますと，中川駅，仲町台駅については５０％から６０％の開発状況になっています。南北タウンセンターにもさまざまな施設が多数建設され，地下鉄の利用者も非常に増加しています。

２　港北ニュータウン計画の背景と事業区域案

港北ニュータウン事業は，昭和３０年代後半から４０年代にかけての高度経済成長という時代背景の中で，計画されました。当時は，急激な宅地開発ブームにより山間部や田園都市地帯が開発され，横浜市でも他律的に乱開発が行われていました。

こうした状況に対処するため，６大事業の一つである港北ニュータウン事業も，乱開発の防止を目的にスタートしました。当時，飛鳥田市長自らがこの地に赴き，市民を説得し，協力を求めたということです。

こうして，港北ニュータウンでは住民参加の土地区画整理事業が行われました。４割の先行買収依頼と，３５％位の減歩という地主の皆さんの多大な協力で，土地区画整理事業が進められました。

３　土地区画整理事業の取り組みと概要

事業は，「乱開発の防止」「都市農業の確立」「市民参加の街づくり」という３つの基本理念，そして，「緑の環境を最大限に保存するまちづくり」「“ふるさと”をしのばせるまちづくり」「安全なまちづくり」「高い水準のサービスが得られるまちづくり」という４つの開発方針によりスタートしました。

しかし，その後社会経済環境が大きく変化する中で，昭和５０年代後半から６１年にかけて，基本コンセプトの見直しが行われ，「商業，業務，文化，教育等の多様な機能を有する多機能複合都市」を目指すようになりました。

４　多機能複合都市への転換

タウンセンターを横浜市の副都心として位置づけると共に，恵まれた自然環境と優れた立地条件を背景に，住み，働き，学び，憩う場を確保して，昼間人口にも寄与する企業等の誘致も行ってきました。

５　魅力ある副都心，活力あるまちの形成に向けて

今後，さらに魅力ある，活力ある街づくりを進めるものとして，①交通体系の整備の推進　②商業，業務施設の集積や公共，公益施設の整備による街の形成　③計画人口の定着と地域の熟成　ではないかと思います。

これらをさらに進め，できるだけ早く良い街になるよう，地権者の方々を初め，区民の皆様のご協力をいただきながら，今後とも進めてまいりたいと思いますので，よろしくお願いいたします。

プレ講演会（第２回）

港北ニュータウンのオープンスペース（グリーンマトリックスシステムの理論と実践）

山本　眞三（住宅・都市整備公団　街づくり推進室調査役）

１　計画当時（昭和４０年代）の状況

当時は，東京圏で５０万人，横浜市でも10万人，毎年人口増があり，住宅難を解消するため，住宅の大量供給が行われていましたが，昭和４８年には住宅戸数が世帯数を上回り，その後は，質の向上をさらに求めるという時代でした。

また，昭和３０年代に大きな公害問題が発生し，昭和４０年代前半に公害対策について議論され，後半には自然環境をどう守っていくかということに人々の関心が移りつつあった時代です。

港北ニュータウンよりも約８年前（昭和４１年）に事業着手した多摩ニュータウンでは，住宅の大量供給に力点を置き，新聞紙上で多摩砂漠と騒がれたこともありました。ですから，多摩ニュータウンでの初期の反省も踏まえて，港北ニュータウンの街づくりがスタート（昭和４９年）したという流れがあります。

２　目指した空間のあり方

開発の方針を決めるにあたって，関係者全員が計画づくりに参加し，４つの方針と７つのシステをまとめたと聞いております。

４つの基本方針のうち，緑に関連する部分について，私なりの解釈をご紹介します。

「ふるさとをしのばせるまち」には，①開発前からの住民の土地にまつわる記憶を呼び起こす街　②新住民のふるさとの記憶を呼び起こし街への愛着を育む街　③生まれ育つ子供たちにとって仲間や家族とともに遊んだ記憶を共有できる街という３つの意味が込められていると考えています。

「緑の環境を最大限に保存するまち」とは，貴重なものを一つ一つ残していくというよりは，生物環境が全体としてうまく残るような街づくりをするということだと考えます。したがって，港北ニュータウンでは，山は山として，斜面は斜面として，地形の特性を残し，その特性にあった自然がより多様性を持つような環境を作ることを目指したのです。

３　計画への展開

当時，この地で緑のたくさんあった場所は，斜面です。ですから，こうした斜面地の緑を極力残していくことが，オープンスペース計画の大きな前提となりました。

そして，緑をより効果的に残していく方法として，分散配置型ではなくネットワーク型の公園配置，また，公共用地だけでなく住宅用地，施設用地，学校用地，社寺用地，文化財用地それぞれが緑を持ち合い，それらの緑をグリーンベルトとして束ねるという手法が用いられました。

4　設計への反映

これまでお話しした方針や，計画を反映させるために，設計上でも様々な工夫がされました。　谷の地形を作るような造成を行いました。モデル公園として最初に整備したせせらぎ公園では，古民家を移築することで，故郷を偲ばせる空間を作り，せせらぎもモデルとして整備しました。

それから，マスターデザインコードと呼んでいますが，グリーンベルト沿いに建つ建物はこうあってほしいということをそれぞれの場所で決めてあります。例えば，鴨池公園沿いに建てる集合住宅は，公園から見える建物は極力背を低く，公園と建物の間には緑を入れるようにして貰いました。

また，３ヶ所に生物相保護区も設けています。神社や富士山信仰による富士塚も残しています。

樹木は，なるべく昔から山にあった雑木を移植するようにしました。それから，この地にたくさんある埋蔵文化財の調査で，はいだ表土を移植の際に使うことで，木がうまく育ちました。

公園の中には，運動施設をほとんど作っていません。平らで広い面積を必要とする運動施設を作ることと，緑を残すことが相容れなくて，緑を優先したからです。そのかわり集合運動場を別に設けました。

整備の素材には，土や石など，なるべく自然の素材を使うようにしました。

一方，歩行者専用道路などでは，なるべく機能的でわかりやすい設計，親しみのもてる素材を使用するようにしました。

３ヶ所ほど，住民参加での公園づくりを試みました。ただ，その後のフォローがありませんでしたので，一般化もせず，愛護会組織が生まれたりということもなかったのが，反省点です。

5　これからの期待

今，実際には，管理がなかなか行き届かない，緑道が暗いなど，問題も出てきていると聞きました。しかし，ここにはいろいろな緑の愛護組織もあると聞いています。ぜひ，こうした活動を今後とも活発にしていただければと願います。

先日，久しぶりにせせらぎ公園に行きました。十数年閉ざされていた古民家が公開されていました。人の常駐する施設ができ，いろいろな人が公園を訪れるようになって，公園全体が見るからによい雰囲気になっていました。

ぜひ，このようにもっと愛される公園になるよう，いろいろな施策をあわせて，緑の基盤をうまく利用できる施設や仕組みを作っていただきたいというのが，計画に携わった一人としての願いです。

プレ講演会（第３回）

港北ニュータウン事業における市民参加

１　川手　昭二（港北ニュータウン研究会代表）
２　村田　夏来（横浜国立大学大学院）

１　港北ニュータウン研究会の活動について

港北ニュータウン研究会では，港北ニュータウン事業を住民参加から市民参加に向かう仕事であったと捉え，その過程を６段階に分けて，研究を行っています。

第１段階：事業を立ち上げる初動期に，行政の呼びかけで，呼び集められた住民が，開発の意味を住民の立場で検討し始める段階。

第２段階：地元が開発事業に乗ろうと決心して，都市計画決定を受け入れるために，開発の公共性と住民の利益とをすりあわせる段階。

第３段階：都市計画決定からマスタープラン策定までの期間で，地元が出した結論の実行を市に要求し，その要求プロセスを定着させる活動期間。（対策協議会の運営方法が定着する段階）

第４段階：マスタープラン策定から事業決定までの期間で，マスタープランを理解し，その土地利用を地元が最大に活用するための研究期間。（建設研究会活動の全盛期）

第５段階：事業決定から換地処分までの期間で，地元の研究結果を具体化するプロセス。（建設研究会の地元メンバーが研究成果を地元に浸透させるプロセス）

第６段階：換地処分後の，土地利用が始まり，日常生活が始まって，具体の問題点・期待を住民参加または，市民参加で住み良い環境を作るプロセス。

本日は，第４段階の研究として，換地方針の決定プロセスにおける住民参加の研究を，村田夏来さんに，第５段階の研究として，土地利用コントロール（まちづくり方針を含む）を策定する過程の研究を，鈴木万喜さんに発表してもらいます。

２　土地利用計画に対応する申出換地について

港北ニュータウンの特徴として，土地区画整理事業を申出換地により行ったということがあります。計画的な街づくりや，地元権利者の生活再構築（農業からの転業）を実現させるため，タウンセンター用地，駅前センター用地，近隣センター用地，アパート・マンション等用地，工場・倉庫・資材置場等用地，集合農業用地といった「特別な用地」への換地を申し出た土地権利者には，飛び離れた位置へも換地するといった工夫を行いました。

この申出換地は，横浜市，日本住宅公団，地元権利者が参加した「建設研究会（昭和４７年～５０年）」によって，生み出されました。

申出の結果は，各種センター用地では，予定計画面積よりも申出量が多くなるところもあり，予定していた計画面積を広げて対応したり，特に人気の高かった街区では，権利者の土地を，その街区と他街区に換地を２分したりして対応しました。

この申出換地に対しては，地元権利者から見ますと，財産３分法（収入を得るための土地，子孫のために残しておく土地，処分可能な土地，に３分する）などが広まり，生活再構築をスムーズに行うことができた，また権利者間の公平性を保てたという評価がある一方，申出を決心する前提となった計画の実現性（地下鉄４号線，公団の団地）との関係で不満を持つ権利者も多少いるようです。

プレ講演会（第３回）

港北ニュータウン事業における市民参加

３　鈴木　万喜（東京都立大学大学院）

３　環境形成のためのまちづくり協定について

まちづくりのための協定とは，住み良い住環境づくりや個性ある街づくりを行うため，住民が街づくりの基準を定めて，お互いが守り合って行くことを約束するもので，建築協定，街づくり協定などがあります。

港北ニュータウンには，過去，生活対策委員会によって作成された「まちづくり協定」があります。これは，現在港北ニュータウンにある「街づくり協定」とは別のもので，建築協定と自主協定を合わせた，建築物だけでなく，広告，看板などの規制や敷地の共同化利用なども含めた街づくり全般を対象としたものです。地元も積極的に検討に参加し，検討の結果できたのが「まちづくり協定」素案です。

素案ができた段階で，生活対策委員会では「まちづくり協定」促進のためのプログラムをたてましたが，各地区のリーダーの勉強会で終わってしまったところがほとんどで，実際に協定が結ばれた地区はほとんどありませんでした。

このように，港北ニュータウンでは，良好な環境を育て，守っていくために「まちづくり協定」素案が作られ，それを普及するための活動が市民参加の場から生まれましたが，協定というかたちでは，実を結びませんでした。地権者が街づくりに興味を持ち，自主的に活動したということは評価されると思います。

現在，港北ニュータウンでは，上記の協定とは別に４地区で建築協定が，５地区で街づくり協定が結ばれていますが，それ以外の地区でも，港北ニュータウンは街づくり協議地区に指定されています。そして，この協議指針は生活対策協会の「まちづくり協定」素案がベースになっています。

他地区では一般的に，現在結ばれている建築協定は一人協定が多く，住民発意の協定でも，地区に問題が起きてから協定がかけられる場合が多くあります。しかしながら，かつての港北ニュータウンの「まちづくり協定」はそのどちらでもなく，問題を未然に防ぐための，地権者自らの活動で素案が作られました。こうした活動は，港北ニュータウンが「市民参加」の事業で行われ，地元がまちづくりに参加していた結果だといえます。

現在，区画整理が終わり，港北ニュータウン事業推進連絡協議会のような組織はなくなったようですが，今後のために，協定についても考えておいたほうがよいと思います。

協定を締結するその活動自体が，街づくりに参加することです。また，次善の策として，「協議指針」にも住民が関心を待つことが大切です。そして，日常での活動や関心も大切にして，多くの住民の方が街づくりに関心を持っていただき，港北ニュータウンがもっと良い街になることを期待したいと思います。

現地視察

午前中は，横浜市北部の副都心を形成しつつあるタウンセンター，地域のオープンスペースの主骨格として公園や緑地，歴史的資産を束ねる「グリーンマトリックスシステム」等に関連して，地区での市民の活動を中心に現地を視察しました。

現地での説明者

1　タウンセンター概要
　　金子　三千男（タウンセンター南商業地区振興会会長）
　　遠藤　英男　（港北東急百貨店店長）

2　通学路の安全対策
　　中島　博　　（荏田東第１小学校ＰＴＡ会長）

3　グリーンマトリックスシステム概要
　　北村　圭一　（横浜市緑政局企画課長）

4　保存緑地の活用，生物相保護区での活動
　　戸塚　洋一　（けやきが丘森林愛護会）
　　市川　順而　（鴨池公園愛護会）

基調講演　1

成熟期のニュータウン

高見沢　実（横浜国立大学助教授）

1　ニュータウンの作り方と成熟期の迎え方

ちょうど100年前の1898年に，ニュータウンの元祖とも言うべき田園都市の考え方が，イギリス人のハワードにより提示されました。郊外の良き環境と都市の活気を両立することが基本的な考え方で，その特徴として，①民間会社としてのニュータウンづくり，②土地を売却せずに貸し付けるという経営形態，③大量的画一的でない家造りの３点があげられます。

その後ニュータウン建設は戦後イギリス政府により進められますが，その手法は田園都市とはかなり異なっています。つまり，事業主体の公的機関が土地を全面買収し，コントロール権を持って事業を進めた結果，機能的には優れているが大量画一的な内容となりました。日本でも多摩ニュータウンはこの形に近い例と言えます。

一方，港北ニュータウンの特徴としては，①地主さん達が参加して土地区画整理事業によってできた街であるということ，②様々なタイプの住宅や店舗がいわば自然発生的に，時々のニーズに応じて建っているということ，③上記２つの結果として大量画一といった問題があまり目立たず，時間はかかりますが自然な街の雰囲気が出ていることです。

2　港北ニュータウンにおけるまちづくり主体

当初，港北ニュータウンは地元の地主さん達，横浜市，住宅・都市整備公団が協力しながら事業を進めたものです。その後時間が経ち，近年様々な人々が住んでいます。今後，公団等の果たす役割は小さくなり，都筑区の果たす役割が大きくなることが予想されます。都筑区の今後の活躍，発展が期待されるところです。

3　成熟期の港北ニュータウンの課題

今後の課題としては，第１に古くからの住民と新しい住民が一緒になってまちづくりに参画することがきわめて重要だと思います。第２に，これまでの基盤整備をうけ，今後都市環境の整備・保全・管理に多くの人々が幅広く参加していくことが求められています。第３に，いろいろな立場，考え方，ライフスタイルを持つ人が一人一人協力しあって，将来の港北ニュータウンを考えていくことが必要です。本日の会議のように多くの方が集まって討議を進める中で，気持ちを一つにすることができればたいへんすばらしいことだと思います。

基調講演　2

港北ニュータウンの生活者意識

岩村　和夫（武蔵工業大学教授）

1　グループインタビュー方式による生活者意識の発見

グループインタビューは社会学的なフィールド調査の手法の一つで，その地区の居住者の典型的な属性を代表する４～５人のグループに対して聞き取り調査を行って把握した特徴を，他のグループと比較をしたりしながら，まちの構造をより明らかにしていくものです。

2　港北ニュータウンにおける典型的な属性別生活者プロフィール

今回は全部で７グループ，調査に御協力いただきました。

まず，この地区での居住年数とまちづくりへの関心を見ますと，以前から住まわれていた方々で，これまで積極的にまちづくりに関与されてきた方々は，まちづくりに関して非常に関心が強くなっています。一方，新しく越してこられた方々は，まちづくりに強い関心を持っている層とそうでもない層とに分かれています。

3　まちの物理的環境と生活者意識・行動パターンの関係性

全部で12のキーワードを，人間（じんかん），空間，時間という形で整理をしました。

例えば人間（じんかん）に関しては，以前からお住まいの方々と新たにお住まいになった方々の間には，経済基盤の違い等もあって心理的なバリアがあるようです。しかし一方では，ふれあいや交流をもちたいとも思っており，既にいろいろな試みが行われています。

第二には，以前から住んでいる方々はこの地区のかつての文化の伝承に関して貴重な情報や体験を持っていて，このことは厚みのある，時が重層する魅力的なまちをつくるために，たいへん重要なことだと思います。

第三には，生活情報や知的情報を非常に渇望しています。情報へのアクセス方法は多々ありますが，情報公開されるものに対して，いつでもアクセスできる場が必要だとの意見がありました。

第四には，この地区ではいろいろなコミュニティの活動が行われていますが，その特徴は，身近な緑の管理や学童保育等，それぞれ個別の問題を活動の出発点としていることです。しかし，お互いにどんな問題を抱えているのかは知られていないようです。

時間に関しては，現代都市の大きな特徴として，時間環境の大きな変化がありますので，その変化に対してまちがどのように対応していくかが今後の大きなテーマになると思います。

4　予定調和的なまちづくり像と，変化し続ける住民意識及び生活シーンとのズレ

港北ニュータウンは計画的につくられたまちですが，その計画理念は住んでいる方々にあまり意識されておらず，鳥の目でつくったまちと，人とか虫の目で見ているまちにはズレがあるようです。また，生活空間と行政区域もズレており，皆さんが生活している周辺区域や買い物をする場所は必ずしも都筑区の中だけではなく，むしろそれ以外のところが選ばれているともいえます。

こうしたことから，日常生活の中では，街並みやまちの環境に対しては比較的，意識として薄いということが感じられました。

5　生活者意識・行動の発見から見える，熟成過程のニュータウンの課題

成熟期にある持続可能なまちづくりというのは，今回行ったような目線の低いところからの調査とかなり上の方から見るものとの立体的なアプローチが必要だと思います。

市民活動報告

A．タウンセンター　　1　金子　三千男（センター南商業地区振興会会長）
　　2　徳江　義治（タウンセンター街づくり協定運営委員会事務局長）
　　3　遠藤　英男（港北東急百貨店店長）

今日のテーマは，基盤ができあがった後の街の住みこなし・街づかい等。様々な角度からニュータウンを知るために，９人の方に報告していただきました。

1

結論から述べますと，現在の日本の建築基準法や都市計画法，それだけでは良い街ができません。例をあげれば，今の法律では準工業地域であってもマンションを建築することは可能ですので，工場跡地に分譲マンションができて，隣の工場がうるさい・臭いということで操業ができないということも起こってしまいます。

そんなことがないように，港北ニュータウンでは開発当初，住むところは静かにゆったりとしたところ，ビジネス関係はタウンセンター，工場は準工業地域というように換地を受ける場所を申し出ることにしました。そのかわり，建築協定で土地の利用をお互いに約束するということを考えましたが，１００％全員で建築協定を結ぶのは非常に難しいことです。

法律は問題があって初めて出来てくるもの，新しくつくる街では，また違った法律の運用を考えなければよい街はできないと思います。

2

地元説明会の時から解散まで委員として務めてきました。海外に数回視察に行ったり，建設研究会の一員として，申し出換地・街づくり協定等の街づくりに関わってきました。

自分が港北ニュータウンに夢を燃やした一番の問題は，農業の保全。それまでの区画整理事業というものは，単純に言って，山や野原をならして，そこを豆腐を切るように四角に切っただけ。そこには，人間的な温かみもなければ農業の駆逐でもありました。そこで私は，農業と開発が相克関係ではなく，協調すべきということに夢を持ちました。

最終的にその必要性が認められましたが，当初そのような主張に，市も公団も難色を示しました。しかし，どこかに農地を保全し，環境に貢献します。また，既存住民も生活を破壊されずに住むことができるという発想に夢を燃やしたわけです。

3

横浜市・公団では直接，携わることのできない商業インフラの整備ということを通じて，地権者の皆さんとご一緒して，港北ニュータウンの発展の一翼を担いたいということで出店しました。出店に踏み切った主な理由は，①タウンセンターが将来は都筑の商業，行政の中心になること，②周辺の地域が，県内で一番平均年齢が低く活気がある地域であることなど。

この地域の特徴として，３０代のファミリーが多く，家族で行動されご主人も子育てを分担されますので，お子さまのために通路を広く取ったり，男性用トイレにも，ベビーキープやベビーシートを設けて配慮しています。

開店当時のヘクタール当たりの人口を比べますと，当店よりもたまプラーザ店の方が少なかったです。１６年たった現在，たまプラーザは３００億を超える売り上げになっていますので，私たちもこの１０年間でそのように育て上げてゆきたいです。

市民活動報告

A．タウンセンター　　4　田中 孝長（仲町台商業振興会会長）
B．グリーンマトリックス　　5　中島 博（荏田東第一小学校ＰＴＡ会長）
6　戸塚 洋一（港北ﾆｭｰﾀｳﾝ緑の会，鴨池公園愛護会ほか）

4

商業者の経営安定，住民とのふれあい，地域の治安・秩序の構築，タウンセンターとの共生及び仲町台の独自性をどう出すかということについて，ニュータウン内の一地域の商業振興会，商業地域としての考え方を，今日は話し合っていきたいです。

一例としては，商業振興会と地元町内会で協力して，毎年７月に「仲町台夏祭り」を開催しており，１～２万人／日の人達に集まって頂いています。また，地域の人と協力して，駅前のさわやか清掃を月に１回行っています。ニュータウンの建設は３０年という長い年月がかかりました。新しく来られた方にも，その歴史，地権者の生活，変遷を少しでも理解して頂き，“ふるさと意識”を持って頂いて，お互いに楽しく繁栄していければよいと思います。

5

スクールゾーンの安全環境の整備について，各行政機関で協議を行っていますが，関係機関の連帯やコミュニケーションの不足，予算等の問題もあり，我々の期待とは裏返しに，そういった整備はなかなか進んでいきません。

歩行者専用道路の利用実態にも問題が多く，幼児・学童・老人のような弱者が通行しているところをバイクが平気で通行したり，ちょっと好ましくない大人がウロウロしたり，ペットのフンの後始末など問題がいろいろ出てきています。

行政に頼るだけではなく，地元・地域・ＰＴＡといったところの活力を再生させて，自分達でもできることはやっていこうを，活動の方向性としています。まず，この秋に「チェックラリーｉｎ通学路」と銘打って，緑の整備，草刈り，清掃活動等をＰＴＡの父兄を動員してやっていきたいと考えています。

グリーンマトリックスが，ヒューマンマトリックス，人間（じんかん）というような人のつながりといったマトリックスになればと考えています。

6

私たちは，できるだけ実際に森や雑木林に自分たちの手を入れていくという活動をメインテーマに考えています。

開発以前の記憶，自然及び原風景を残していくことが，グリーンマトリックスの意図の一つと聞いていますが，もともとの緑は，土地の所有者の管理により維持されてきたものです。それが開発された結果，公園等になった現在では，十分に人の手が入らなくなり，竹林が荒廃したり，雑木林が常緑の林に変わるというように好ましくない方向に変わってきています。そのため，都市の市民が，管理のために人の手として登場したらどうかと考えたのです。

横浜都民といわれるような人たちにも，地方出身者が非常に多いです。愛護会をつくり，自分達で手入れするようになったのは，ここに残された雑木林や竹林が，非常に懐かしく親しみのもてる存在だからではないかと思います。

市民活動報告

C．コミュニティ　　7　男全　冨雄（第一共同開発社長，北山田町内会会長）
8　山田　美千子（都筑イベント倶楽部会長，荏田南連合自治会広報担当）
9　常楽　弘明（ホームページ「緑の小径」を開設）

7

北山田町内会をお預かりしていますが，町内会の中では新住民，旧住民という言葉を使わないようにと言っています。大げさな話かも知れませんが，縄文時代に北山田には誰もいませんでした。みんなよそから移り住んできました。だから，昨日今日越してこられた方も３００～４００年前に移ってきた人も，全部よそから北山田に移ってきた新住民だよと言っています。

最近一番の悩みは，他人の世話にならなくてもやっていけるいう人が増えてきたこと。空気以外では，人は全部，他の人の世話になっているから生活ができるのだと思います。一例をあげれば，消防団が２４時間体制で活動しているおかげもあって，安全に生活ができるのです。

住都公団や横浜市に一生懸命にやって頂いて，整然とした街並みはできますが，本当に住み良い街づくりには，お互いに相手の気持ちを理解し合えた街にすることが必要だと思います。

8

昭和５８年に東京から移り住んで，荏田南小のＰＴＡ会長に。地域の人々からの依頼で，ＰＴＡから自治会に呼びかけて，子供たちのふるさとづくりと新旧住民の交流のために夏祭りを始めたら，これが成功。それがきっかけとなって，地域の自治会とＰＴＡが横に手をつないで，荏田南小学校区地域連絡会として発足しました。そのコミュニケーションペーパーとして「フラミンゴ」をつくってきました。本当に役に立っているかどうかは別にして，続けることに意味があるのだと思って私は関わっています。

一方，都筑イベント倶楽部は，イベントを通じて知り合った新旧住民と行政・企業とのパートナーシップ型のまちづくりを心がけて活動してきました。

１５年間の活動で感じるのは，自治会・連合町内会活動と，テーマ型の自主活動グループとが協力しあい，それに行政・企業が協力する関係によって，より良いコミュニティづくりができるということ。そして，その成功のポイントはキーマンとなる人物探しにあると思います。

9

パソコン通信を使って，コミュニケーションを取ろうという活動をやっています。「緑の小径」は，①生活情報交換をしよう ②より快適な街にしていくために話し合おう ③さまざまな話題を通じて楽しくおしゃべりし，友達の輪を広げましょう。この三本柱を基本に活動しています。三番目が中心になりがちなので，ちょっと悩んでいます。

特徴は，非常に気楽な集まりで，行政の関わりやまちづくりというのではなく，自分達が楽しくやっていれれば良いと考えている点。楽しみながらも，公共的なお知らせの掲載などで街づくりにも役立つというふうな姿になっていければ理想的かなと考えています。

Ａ－１グループ
タウンセンターの魅力づくり

司　　会：小坂　宏　（芝浦工業大学助教授）
主要報告者：遠藤　英男（港北東急百貨店店長）

規模・広さ

- センターの商業エリアが大きすぎると思う
- 駅周辺に小さい店が少ない

ゾーン

- 商業と住宅をくっきり分けすぎ
- ゾーンをくっきり分けすぎて，街がまとまらない
- タウンセンターとグリーンマトリックスの境界が景観的に分かれすぎ

ゆるやかでなじんでいく誘導のまちづくり

環境

- バッファゾーンも必要
- あいまいな部分をあえてつくっていくべき
- 緩やかな移行がもっとあるべき
- CO_2削減のモデル地区を目指そう（クリーンエネルギー，夜間電力の活用など）
- 横浜の小町としての，港北ＮＴとならないのか
- 理想化した町づくりの中で，界隈（バー・酒場等）のあり方をどうするか
- もっといろいろな風景があっても良い
- 歩いているぶんにはキレイだが，そらぞらしい

大型店

- 地下鉄で結ばれている日吉の東急百貨店との競合関係は？
- 今後，大型店と小型店の相乗効果をどうつくっていくのか
- 大型店と小型店との相乗効果をどうやって図っていくか
- 大型店ですべてが済むので，街にでる必要が無くなる
- 大型店だけで完結して，街に活気が無くなる
- 大型店舗進出によって街の魅力が低下しないか（ディスカウント店による景観，歩行空間等）
- ディスカウント店が多くなると，目立つことを狙って景観が悪くなる

商店・商店街

- 小さい商店を街の顔にした方が良い
- 街としての魅力は商店街にある

小さな店で魅力をアップ

利用者

歩く

- 歩くことを前提としているのなら，歩く人のことを考えた整備を
- 街づくりは歩くのを前提に
- 車ではなく，歩行者中心に変えていくべき
- 鉄道利用者増加を踏まえ，商業の顔をどこに向けていったらよいか

店の種類

- 小規模だけど，個性ある店舗のエリアが，各センターにあると良い
- 商店の出入りがはげしい。売れない店は半年から１年で消えていく
- もっといろいろな店がでてきても良い
- 他のＮＴでは人口にあわせた店をつくるが，港北ＮＴでは一度に建てた
- 中央駅前センターはドラマにでてきそうだが，店にバラエティがない（特に飲食店）

南と北

中央地区

- 中央地区が発展することが重要
- センター北と南は将来的にはつながる。中央地区で何をやるかが問題
- 中央地区が，これからどうなるのかに期待と疑問がある
- センター北と南は歩ける距離だ
- 港北ＮＴで同じものができるより，違いをつけた方が良い
- 商業を全部，張り付かせるのは大変
- センター地区が南北に分かれていること
- センター北と南がつながらない。地区として切れている。

立地誘導

- 走りながら計画を変えていく
- センターの中心性を保つために，いかに中心に民間の立地を誘導するか

協定

- 街づくり協定がどのくらい行われ，効果があがっているのか
- 実際の経験から，街づくり協定の効果という点からの評価を聞きたい

住宅

- センターに住宅を認めることで，人口を増やしていく
- 副都心機能として職住近接（業務と居住者の関係）をどう考えているか
- タウンセンターにも，もっと住宅を作れるように町づくり協定を柔軟に
- 街づくり協定を柔軟にして，住宅を認めてはどうか

街の顔

- 街の顔がない（やっと東急ができたが，まだ顔になっていない）
- 郊外型の大型店が，今の街の顔になっている
- 自然発生的な文化施設ができると良い

公共施設

駅前広場

- 駅前広場が寒い・風が強い
- 駅前広場に夜間，変な若者が集まる
- センター内の公共施設との関係について（平日・休日）
- 駅前広場が広いわりには，街灯が少ない
- センターは駐車場が少ないのでは

住民参加

- センター地区はどうやって，住民参加をしたのか（実態，公募・分科，住民）
- センターに街の自治機能が欲しい
- センター地区は○○町の中心としての商店街

集客

- 他の企業も中心にやってきたくなるような魅力をセンターにつくろう
- 全国から人を呼べる場所にしなければ

地元

- 地元の商業振興会に期待したい
- 地域（地元）の盛り上がりもつくらないと
- 地元より，周辺から集まる買い物客の方が多い。
- 東急に集まるのはＮＴの人ではない。地元のコミュニティがもっと必要
- 外から来る人だけで，盛り上がると住民はひいてしまう

地元ががんばって街の顔づくり

A－2グループ
タウンセンターの魅力づくり

司　　会：高見沢　実（横浜国立大学助教授）
主要報告者：徳江　義治（街づくり協定運営委員会事務局長）
田中　孝長（仲町台商業振興会会長）

タウンセンター

NT計画当初の理念

- 農業と開発の協調→港北NTにかけた夢
- 誰もが住みたくなる街を目指していた
- 昭和47年に建設研究会をつくり，街づくり協定・申し出換地を発想した
- タウンセンターへの申し出は街づくり協定の締結を前提にしてもらった
- 共同で建物利用をすれば短冊換地でも可能だと思った
- センターの位置を誰が決めたのか

街づくり協定と法律との関係

- 街づくり協定がうまく機能していない理由は何か
- 街づくり協定の効力と運営管理
- 街づくり協定の風化→法制度と街づくり
- 法律の運用に工夫を→新たな街づくり

ソフト系

地域合意

- 地権者が売買すると協定維持が困難
- どのように街づくり協定で合意を得るか

独自性がない

- 街の顔が見えない
- 地域の独自性が見えない、

ハード系

- タウンセンターの魅力づくりと全体計画との関係は車か歩行者中心か
- 住民の地区内の移動が不便ではないか（緑道の積極的利用）
- 階段が多すぎる
- 幹線道路側の建物の表情も大事にしたい

計画とのズレ

- 準工業地域にも住宅が立地

街づくり協定の今後

拘束力が強い

- ソフトな街づくり協定から規制力のある地区計画の導入を
- 地権者のするさが狭小宅地を生んだ地区計画で厳しい規制をすべき
- 建築協定は，有名無実であった
- 街づくり協定申し出の段階で署名させるべき，そうでないと無意味

柔軟性に富む

- 最低限の項目は地区計画で担保の上街づくり協定でルールを決定
- 地区計画を弾力的に運用したい
- 街づくりを条例化し，フレキシブルにした形でルールをつくってみたら
- 何年おきに更新できる協定とすれば自由度も補足可能ではないか
- NT憲章をつくりたかった
- 将来はNT全体の協定もやりたいという考えもあった
- 時限立法のような形で街づくり協定と地区計画を合わせられないか

合意形成

- 街づくり協定の今後は，住民参加の意志決定メカニズムの構築が必要
- 土地所有者間の話し合いを十分にして担保や魅力づくり方策を検討
- 商業地の土地所有者の合意形成を促進させる

地区計画＋まちづくり条例

若い年代の住民は魅力ある街づくりのために何をすべきか

地権者の生活再建をどうやっていくか

質問

- 職住別のNT NTは夜に帰るところ？
- 今後，NT計画を行う場合，重要となる点は何か
- タウンセンターの都市環境のイメージは変化したかまた実現可能か
- タウンセンターを誰が利用するのか（内部の人・外部の人）
- 規模の問題 適正な街の大きさとは？
- 徒歩圏を想定した駅前・近隣センターですが車対応はどうなっているの

センター地区間の連携

- タウンセンターとその他のセンターとの関係・共生は？
- タウンセンターとその他のセンターの協調（業種）はどのように図られているか
- 大規模店・SCと小型店（商店）との関係は？

仲町台駅前センター

街づくり

- 仲町台センターでは，独自性を出したい
- 仲町台の街づくり 独自性 ふるさと意識 他地区との共生
- にぎわいのある街 グルメの里づくり
- 商店街と地域との連携

理念

- タウンセンターとの共存
- 街の活性化 治安秩序を図る 下町的情緒の街づくりを目指す

課題

- 広場が狭い ゴミ・自転車問題を解決する必要性

- 仲町台夏祭りを，毎年7月に開催している
- ニーズを把握し，魅力づくりを行うために祭を通じて利用者と交流する
- 地権者・商業者の立場としては，新住民にふるさと意識を持って欲しい
- 駅前において「さわやか清掃」を実施している

住民参加の意志決定メカニズム

幅広い市民が参加

他地区への情報発信

- 周辺地区から来る人たちに都筑の活動を発信する方法を考える
- 地権者は副都心にとらわれず，世界都市にしたい

拠点・場づくり

ネットワーク

- 駅前センターのネットワークによって，各センター間の連携，補完・回遊性を図る
- 住民生活が徒歩圏内で出来るまちづくりセンターのようなものを設置，議論しながら街づくりを進める

将来への提案

楽しさ

- 空間に深みを持たせて欲しい
- 人が歩いて楽しい空間を持つタウンセンターをつくる
- 均一な空間，まちなみはつまらない
- 居住者以外は商店街や散歩道等を整備しないとSCと駅しか往復しない
- 物販施設だけでなく，新しい集客施設を設け周辺からの交流人口を確保
- タウンセンター内の緑化に積極的に取り組んで欲しい
- 沿道型の小規模施設では一時停車・駐車帯を設けてはどうか
- もう少しコンパクトな単位の街に空間の細分化が必要なのでは
- 百貨店だけでなく散歩することが楽しいような商店街の整備
- 車での移動が中心の街であり，情緒人のぬくもりが感じられない
- 段階的開発・休閑地の利用によって完成途中が殺風景にならないように
- 地区計画等でセットバックした部分を賑わいの空間として整備する

統一感

- 街並みに統一感を持たせるために，バーナー等を共同設置したらどうか
- TCをクウォリティのある街を目指して，看板も含めた色彩計画を行う

福祉

- お年寄りと交流できたり，高齢者が住みよい街が将来あるべき姿では
- 福祉施設の充実

交通

- 自転車社会に向けて，駐輪場の整備充実
- 地下鉄4号線の完成まで，バス路線の充実

文化・教育

- 大学・高校の誘致を積極的に
- 古代・農村文化の伝承館の設置

Ｂ－１グループ
グリーンマトリックスの成長管理と市民活動

司　　会：小堀　洋美（武蔵工業大学助教授）
主要報告者：戸塚　洋一（港北ニュータウン緑の会）

港北ＮＴとしての理念“緑”

- 谷戸の景観を残す
- 市等は初め，農地・緑地の保存は考えていなかった

地域の記憶

景観の保全

- 開発前の記憶を残す
- 昔からの緑地，竹林・雑木林が残されている
- ＮＴ住民は，横浜都民であるが，このような“緑”を求めている

植生等の変化

- 竹林・雑木林が公園，緑道の一部となり，全く手が入らなくなった
- 竹林・雑木林の荒廃

成長した緑のトラブル

- 昔からの竹林や雑木林は，もともと人の手が入っていた
- 自然を観察するだけでなく，人間の手を入れていく
- 実際に自分たちの手を入れていく緑地にしたい

- 弱者への対応（歩行者専用道路・公園）
- 緑道でのバイク・不審者・ペット問題
- それらの通学によるコミュニケーションの不足
- 居住地周辺の樹木の成長しすぎと日照の問題
- 緑の成長により，日照権が侵されている

- 残した緑に対して，管理主体が明確でない
- グリーンマトリックスは，使い方は書いてあるが，管理者が書いてない

緑道の現在の使われ方

- 小中学校は，歩行者専用道路・緑道等を通って通学
- ジョギングコースは，非常にすばらしい
- 緑道等の人通りが少ない。もっと人が歩くようにするのは

安全確保の不備

- 保存緑地を通っての通学安全面について連絡等が不十分でないか
- 青少年・大人・ペット
- 事故が起きたときの責任問題（特に行政側）
- 一つの緑道において，管理者の違いによっているので統一化
- 各行政機関の連携がない
- 歩行者空間に，どのように車を入れていくか

- スクールゾーンの安全確保（各行政の縦割）

保全管理のための行政・市民の役割

行政

- 分譲住宅に市から委託され竹林を管理している（7，8万）
- 押しつけの緑道管理
- 押しつけの緑道（市から勝手な空間の提供）
- 行政の制約（予算等）
- 横浜全体の税金を，ＮＴだけに使うわけにいかない
- 行政は，可能な範囲でお金を出した方がよい
- 専門的技術的知識の必要性と対応（市民と行政）
- 行政機関に頼るばかりでなく，自分たちの手で共同作業
- 管理方針，緑のあるべき姿は“啓発された”市民が決めるのか

住民

- 新住民が，どのようにＮＴに関わっていくか
- 旧住民の関わり　新住民の関わり
- 住民一人，一人がめざす街の姿をしっかり持って生活すれば，緑は育つ
- 保存林が人の手から，離れていくのを防ぐ
- 緑の管理とは専門的なので，一般人には難しい
- 余暇，遊びで管理を行っていいのか望ましいあり方は？
- 緑の景観を残す自分たちで手入れをする
- 行政にだけ任せるのでなく，やれることは住民で行う（ﾁｪｯｸﾗﾘｰ）
- 道だけでなく，人と人とのつながりにしていく
- グリーンマトリックス→ヒューマンマトリックス

市民がどのように育成管理

市民が主人公

- 緑の管理はその住民まかせ（市からの補助もほとんどなし）
- 団地内の緑の愛護会で管理する（業者にまかせない）
- グリーンマトリックス沿いに点々と管理会が発足→ＮＴ全体の緑の会
- 公園を普通に管理する→ゴミ拾いの大変さ
- 散歩する人が少しずつゴミ拾い

社会全体（特に若者）を管理の中に取り込む

- 学校，企業を含めた環境保全の教育
- 学校教育「道徳」の一環として，子供たちに託していく
- 緑を管理する人も大切だが，グリーンマトリックスの理念を教える

管理保全を楽しむ

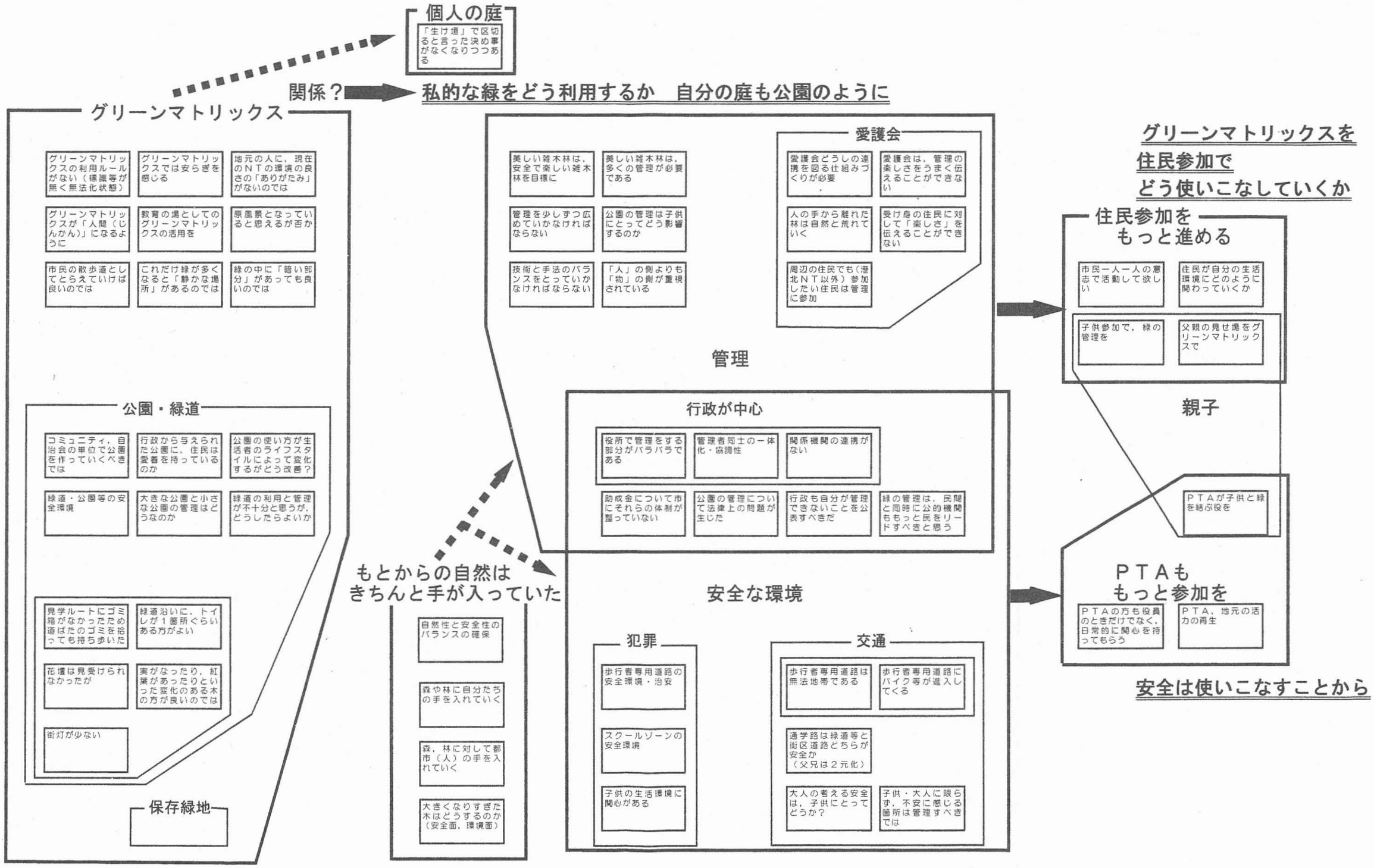
- 常緑樹を押さえるために，伐採した木を炭焼する会を作る
- せせらぎの停滞している場所を発見して，改善する案を考える会を作る
- 歩行者道路に面する家の庭で美しさに役立っているものを探す会を作る

どのような緑を残すのか

- 既存種を残すことと，新たな街のための緑をどう作っていくか
- これからの林相を，どうしたらよいか考える必要がある
- 技術等はないが，緑の保全に意欲のある人に関わってもらうため方策は
- 地域の農家の知恵は緑地の維持に生かされているか
- グループのサブリーダーは育っているか　長続きする組織か
- 緑のリングに生活の場を作り，人と生物の共生・ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝが可能
- 緑の空間の充実モデル　子供の生活環境の関心
- 雑木林の管理技術を継承するなら，食文化や民俗芸能にも領域を広げる
- 勉強会を聞きお互いに助け合う

Ｂ－２グループ
グリーンマトリックスの成長管理と市民活動

司　　会：野田　正彰（京都造形芸術大学教授）
主要報告者：中島　博　（荏田東第１小学校ＰＴＡ会長）



Ｃ－１グループ
コミュニティ形成に向けたネットワーク

司　　会：福富　洋一郎（早渕川をかなでる会）
主要報告者：男全　冨雄　（北山田町内会会長）
常楽　弘明　（ホームページ「緑の小径」）

話し合いテーマ選びのまとめ

課題

異なる層との交流

- 新住民（サラリーマン）と旧住民（農家の人）とのコミュニケーション
- 新住民？旧住民とのふれあい
- 新住民の農業参画
- 異業種（活動団体）交流におけるコミュニケーション
- 地域内外国人との交流
- 地域内技術交流（地域特性）（その道の達人）

コミュニティの基盤

- 家を出たら無関心の人たち。もっとまちに関心を持とう（まちを知ろう）
- 町内会とのコミュニケーション
- まちづくりにおいて仕掛けられるコミュニティ空間（ニュータウンにおける基盤整備として）
- 問題，課題を話し合う「場」の確保
- 活動のための資金づくり

情報関連

- ワンマイル生活情報をどうすればアップデートに収集提供できるか
- 各活動グループの情報交換の方法

その他

- 防災のためのコミュニティづくりはどうするのか
- 老人にとってどんな町

解決の方法

- 楽しみながら続けるコミュニティづくり
- ツールとしてふるさとの歴史探訪
- つづきクリーンアップ会を作りたい
- イベントを通じたコミュニティ作り
- 区民外・市民外の人に対する港北ＮＴツアーがあると良い

その他

- プレの会議を聞いた人から見ると，理解の仕方が違うのでは？
- 早渕二丁目は，車のアクセス道・店もない，未完成地区ということ？
- ｺﾐｭﾆﾃｨの区分け（町内会，自治会，‥会）をしないと議題が分からない？

ＮＥＷタイプの町内会もあります

- 加入の強制はしない。入りたくなるような活動をすることが必要
- 町内会の内容が地域によって違う。

テーマコミュニティの有効性

- 新しいことをするには，テーマコミュニティの方がアクティブで効果的

住民主役・行政もお手伝い

- わがままだけでは全体の調和ができないことが分かった
- 市民（住民）が中心で，行政は手伝い

社会への貢献へもつながっている

- 盆踊りの寄付金は積み立てて，消防自動車やホースを買った
- 行政がきっかけ作りをする

仲良く相互理解

- テーマｺﾐｭﾆﾃｨと町内会を結びつける人が必要

テーマコミュニティと町内会の交流

地域課題をみんなで話し合う場と機会

いろんなチャンスをつくろう

- 年に一回ぐらいの話し合いがコミュニケーションを作る
- 月に一回の区民サロンを作ろう
- テーマで活動していることを，バインディングする機能が必要

場所も必要

- 定期的な交流の場をもとう

コミュニティづくりの基本

「まち」を知る

- 「町だより」を作って全戸に配布
- 集まらなくても，自宅にいてコミュニケーションできるのがｲﾝﾀｰﾈｯﾄ
- まちでどんな活動をしているか知らない

「楽しみ」が大切

- 趣味を基本にしたコミュニティづくり

一人一人の姿勢

- 相手の意見を尊重すること

コミュニティはまちづくりの基礎

C－2グループ
コミュニティ形成に向けたネットワーク

司　　会：岩村　和夫　（武蔵工業大学教授）
主要報告者：山田　美千子（都筑イベント倶楽部会長）

まちづくりとは

人の関係

- 理想は楽しみながら，まちづくり
- 住み良いまちづくりとは，お互いが理解できるまちである
- 住みよいまちは，互いが理解し合えたまち
- それぞれの意見を理解し合うには，その機会を持つことが第一である。
- 住み良いまちづくりは，それぞれの意見を理解し合うことが必要。
- まちづくりは，人づくりである。（若葉連合自治会，都筑イベント倶楽部）
- 街づくりは人づくり，人づくりはキーマン（キーウーマン）づくり
- コミュニティづくりの必要①町内会と活動グループのつながり②新旧住民の理解
- まちづくりは，町内会とテーマ型活動と企業・自治体が手をつなぐようなキーマンを見つけることが鍵
- 「上がり」のないまち。「上がり」のないコミュニティ
- 「まちづくり」って何？　時間・空間・時間が変化し続けるまち

どうしたら交流できるか？

- 地域コミュニティとテーマコミュニティの共生が重要である
- テーマコミュニティと地域コミュニティの人々との連携がうまくいく方法は
- 色々な活動が行われていると思うが，それらのつながりはあるのか
- アイテム型コミュニティのタコツボ化→情報・アクティビティへのアクセス拠点を一元的な活動をどう続けられるか
- （新住民・旧住民どおし，新旧住民間）心理的バリヤー→知ることから始まるまちづくり
- 既にあるマンション等のコミュニティと今後できるマンションとの融合方法は
- 転入者にとっては活動に入りづらい
- 旧住民とのつながりは，区民祭りなどのイベントで交流されている
- 町会を預かる中で新旧住民とはいわない。皆，よそから移り住んだ
- 北山田の住民は，すべて新住民である
- 世代間での街に対する意識の差があるのでは

参加

- ＮＴ内で“農”を媒介したコミュニケーションは成り立つのでしょうか
- 地権者とのつながりはある

農地

- 住宅地と農地との共生ができている
- 戸塚区は緑が多い。畑を借りて住民が農作業を行っている（住民との交流）

- 都筑区は大企業が多い
- 住民と企業の連携が重要である
- 企業が無料で場所を提供している

企業

男性

- 男性よりも女性の問題が多い（子供などで）
- 活動には男性が多くなっている
- 商業地域では男性が中心
- センター南で，男性は月１回活動している

テーマコミュニティと地域コミュニティの協力関係

（女性のイニシアティブ）

- 女性の力が強い（男性が引きつけられている）ことをプラスにする
- 時間の多様化（質・量・速度）が，コミュニティのあり方を変えてきたが，対応方法は
- 悩みは「人の世話にはならない」という人，皆，人の世話になっている
- ＮＴができた当初は，コミュニティが必要であった

情報の共有？

- ケーブルテレビの有効利用（ケーブルネットつづきの森）
- まちの教室の活動がイベントクラブの活動の母体になる
- イベントクラブは，今後，自然・環境・福祉へ広げていくことが必要
- フラミンゴは，①オープンにできるシステム②いざというとき役立つ
- フラミンゴ　小学校区の集まり校区の自治会とＰＴＡが手をつなぐ
- 緑の小径は，９６年６月開設で，人数は１２０人である
- 緑の小径は①半径10 KMのつきあいの市民の技能②生活情報③交流④インターネットの活動⑤住民間の情報の交流

場が大事

拠点

- 武蔵工業大学が地域のコミュニティ大学になるよう期待している。（企画，学生交流）
- 場としては，支援センターがとても重要だ
- 都筑古民家の活用で交流できる。場が重要
- 住民活動の場所が必要である
- 武蔵工業大学がコミュニティづくりの発信基地となって欲しい
- 生活・知的情報へのサイトとして，生涯学習支援センターが一つの役割
- 交流できる場所の必要性。世代を超えた住民の交流（都筑民家園等）
- 人と人とをつなげる場所が必要である
- 武蔵工業大学も期待する場だ
- （区民のたまり場をもっと開放して）支援センターが夜も土日も使えるようにして欲しい

生協

- 区民の活動のパートナーとして「生協」をもっと見直して欲しい

農地

- 都筑区でも農地の借りあいが必要ではないか

イベント

- 畑を借り，皆で作物を育て収穫を祝うプロセスによってコミュニティを作る
- イベントだけでない都市づくりである
- イベントを通しての住み良いまちづくりをどう理解してもらうか
- 後から来た人たちのためのイベントをする（祭りなど）

人間（じんかん）・空間・時間・情報の共有

ＮＴの未来は

- コミュニティの15年間のまとめをする事で理解できる
- 市の職員も支えてくれた
- 港北ＮＴには未来がある。夢がある。
- 港北ＮＴは，歩いて楽しい街である
- 変化が楽しみ。少しづつ変わるまち

課題

- 今後の高齢化社会に向けて，ニュータウンはどうなるのか
- 高齢化社会に向けて，今の集合住宅の戸数は多すぎる
- ニュータウンには核家族が多い
- 今の活動が，高齢化社会での活動につながるのではないか
- 支え合う住宅が必要ではないだろうか？（１０戸ぐらいの）
- 住まい方，寄り集まって住めるところが欲しい

感想

- コミュニティの幅は情報量で決まる
- 一番多数の３０歳代の人たちを真に支える体制が一番欠けていると思う
- このまちを，もっと人々の交流ができて安心・ほっとするまちにしたい
- 農家の方（旧住民）は新住民と農業を通して交流を望んでいるのか
- 若い方が都筑区，コミュニティに対してどのように感じられているか
- 今まで知らなかった港北ＮＴの計画水準の高さと住民パワーを実感
- 港北ＮＴの計画水準の高さと住民パワーを実感
- もっと長い時間が欲しい。この会を続けて欲しい。
- この続きをやりたい。聞き足りない。言い足りない。

参加するきっかけ

- きっかけは，公団の人（ＰＴＡで劇団をよぶ）
- 前向きな人たちが多いので，非常に入りやすい
- 言うことだけではなく，何か実行する。楽しむことから入った。
- それぞれ好きなものを見つけて実行する
- まちを自分のものにするために自然，環境，福祉の面で積極的に参加

活動の意味づけ・後づけ（持続的な動機づけ）

- 持続することは大変だ，そのためにも意味づけが必要
- 活動の意味づけ，系統立てたものが必要となっている
- 中区で様々なメンバーがネットワークを組む“まちづくり”をキーワード。後づけ，意味づけが必要になっている

討議結果報告

Ａ－１グループ　小坂　　宏（芝浦工業大学助教授）
Ａ－２グループ　高見沢　実（横浜国立大学助教授）

Ａ－１グループ

１　ゆるやかでなじんでいく誘導のまちづくり

タウンセンターは商業業務地と住宅地がくっきりと分かれすぎていて街がまとまりません。街に一体感をもたせ，住んでいる人に優しい感じを与えるために，あえて曖昧な部分や界隈（バー，酒場等）をつくります。そうすることによって，土地利用が緩やかに変わっていったほうが良いのではありませんか。

２ 小さな店で魅力アップ

タウンセンターは大型店等の建設が先行していることもあり，そこだけで用事が済み外にでる必要が少ないため，街の活気がなくなってしまう恐れがあります。そこで，もっとたくさんの人を街にでやすくするために，小さい商店が並んでいる商店街のようなものがあると良いのではありませんか。成熟過程なので，すぐには無理ですが，そういうものをもっと多くつくる必要があるのではありませんか。

３　地元ががんばって街の顔づくり

地元の盛り上がりが不可欠ですので，地元の商業振興会に期待するとともに，車だけを考えた街づくりを行うのではなくて，例えば歩行者というものをもう一回見直して，歩いてくる人がちょっと立ち寄れるようなお店，あるいは歩行者システムとして，タウンセンター南北間に歩いて楽しめる道をつくったら良いのではありませんか。

Ａ－２グループ

１　地区計画＋まちづくり条例

タウンセンターは現在，街づくり協定で建築誘導を図っていますが，うまく機能しなくて困っています。特に今後の街づくりを考えますと，緩やかなルールと拘束力の強い規制との二重のしくみが必要ではありませんか。例えば，最低限の項目は地区計画で担保の上，街づくり協定でルールを決定する等のシステムが望ましいのではありませんか。

２　住民参加の意志決定メカニズム

街づくり協定の取り決めを含めて，今までのまちづくりは地権者が中心でした。今後は，もう少し幅広い市民が参加するような意志決定メカニズムにすることが必要ではありませんか。この場合，単にタウンセンター内で閉じこもるのではなく，外からのアイデアを取り入れたり，逆に外部へ情報発信すること等も考えたら良いのではありませんか。

３　拠点，場づくり

駅前センター・タウンセンターのネットワークによって，各センター間の連携・補完・回遊性を図ったほうが，よりよい街づくりが行えるのではありませんか。そのためには住民全体が意見提出等できる“まちづくりセンター”のようなものを設置する必要があります。

討議結果報告

Ｂ－１グループ　小堀　洋美（武蔵工業大学助教授）
Ｂ－２グループ　野田　正彰（京都造形芸術大学教授）

Ｂ－１グループ

１　市民が主人公

「緑の環境を最大限に保全するまちづくり」の具体的システムがグリーンマトリックスですが，この理念ができて３０年近く経過したため，様々なトラブル（残した緑の管理主体が不明確なこと，植生変化等による緑の荒廃，犯罪やゴミ等，安全の問題）が発生してきています。行政はこれからもっと資金面で制約が出てきますので，その課題に対処するためには，管理主体を行政だけに任せるのではなく，私たち市民が新しい主人公になって関わっていく必要があるのではありませんか。

２　社会全体（特に若者）を管理の中に取り込む

一握りの人ではなく，多くの人が関わり，関心を持つことで，初めて維持管理が行われます。そのために，専門家等にバックアップしてもらいながら，小・中学生や武蔵工業大学の大学生等の若い人に関心をもってもらうようなシステムづくりが必要です。またこのシステムがうまく機能する事によって，社会全体として，より多くの人が維持管理に関わってもらえるのではありませんか。

３　管理保全を楽しむ

管理保全は，作業そのものを積極的に楽しんでやる，管理している人を見て楽しむ，それから，管理された空間を共有することによって楽しむ，等いろいろな楽しみ方がありますので，ともかくみんなで楽しくやりましょう。

Ｂ－２グループ

１　グリーンマトリックスを住民参加でどう使いこなしていくか

地域の住民が徐々に年齢を重ねることによって，住んでる人の緑の利用の仕方も変わっていきます。そのことを見越して，もっと子供達に呼びかけていくために，ＰＴＡに参加証を配布する等，いろいろな参加イベントや会員を募るとかということが大事になると思います。

２　安全は使いこなすことから

犯罪・非行や，本来通行してはいけない緑道・歩行者専用道路にオートバイが入ってくることによる安全性の問題もあります。だが，そのために緑道等を使わなければ，結局，マナーの悪い人だけが使うことになりますので，“使いこなす”ことが肝要となります。そのためには，地域の人たちがいい散歩道として利用する等の視点が必要でしょう。

１．２を通じて，それに親子をいかに結びつけるかが鍵の一つです。

３　私的な緑をどう利用するか。自分の庭も公園のように

個人の庭や古い林にも，春になったらいい花が咲くようなところもありますので，そういったものを地域の人がうまく利用することも考えられるのではありませんか。私的空間と公的空間（公園・緑道・保存緑地等）が混ざり合いながら地域を見直す目をつくることも大事ではありませんか。

討議結果報告

Ｃ－１グループ　福富　洋一郎（早渕川をかなでる会代表）
Ｃ－２グループ　岩村　和夫　（武蔵工業大学教授）

Ｃ－１グループ

１　テーマコミュニティと町内会の交流

都筑区におけるこれからのコミュニティの作り方は，特に新たに何かつくるのではなく，既存の町内会とテーマコミュニティの交流をうまくはかっていくことで良いのではありませんか。町内会とテーマコミュニティのそれぞれの特長を，活用・絡み合わせて新しい交流をつくっていけばよいのではありませんか。そのためには，それを結びつける人や組織は必要です。

２　地域課題をみんなで話し合う場と機会

「今日話し合ったことは，お互いによく理解できました。」これがまさに“１のテーマコミュニティと町内会の交流”ではないかということで，このような地域課題を皆で話し合う場と機会をつくる必要があります。例えば月１回の区民サロン等の定期的な交流の場等の提案もされました。

３　コミュニティはまちづくりの基礎

タウンセンターやグリーンマトリックスの課題解決も，お互いの目標や意志疎通を図っていくことをしっかりやらなくてはできないのではありませんか。つまりコミュニティがすべての基礎ではありませんか。さらにコミュニティというベースをつくっていけば自ずから“いい街・いい区”ができるのではありませんか。今後は，行政と住民のパートナーシップによって，今回のような企画を続けてほしいです。

Ｃ－２グループ

１　テーマコミュニティと地域コミュニティの協力関係（女性のイニシアティブ）

グループインタビューでも感じたことですが，女性の力がものすごく輝いているといいますか，強いというかそういう印象を受けました。ある意味では男性社会かもしれない地域コミュニティと，テーマコミュニティ活動を引き出していくような女性のイニシアティブとがうまく協力できていけば，多種多様な活動ができていくのではありませんか。

２　活動の意味づけ，後づけ（持続的な動機づけ）

コミュニティ活動は続けることに価値があるともいわれます。続けていくためには，大学や勉強会等の場で，第三者的な評価やその中での自分の位置づけ等の意味づけや後づけが不可欠になります。港北ニュータウンの市民活動の大きな特徴として，そのような段階を迎えていると思いました。

３　人間（じんかん）・空間・時間・情報の共有

これは全体を通じて言い得ることかもしれませんが，人間，時間，空間，情報の共有が，すべてのコミュニティ活動の基盤となるのではありませんか。新住民，旧住民の枠を越えて人間，時間，空間，情報を共有する場（大学や都筑民家園等）がとても大事であり，そのような場をこれからもいろいろなところで獲得をしていくことがコミュニティづくりの非常に大きな要素ではありませんか。

コメンテーターによる総括

1　川手　昭二（筑波大学名誉教授）
2　陳　　亮全（国立台湾大学助教授）
3　野田　正彰（京都造形芸術大学教授）

1

グリーンマトリックスについては，パンフレットでおわかりのように，計画的な空間の中で，どのような活動をするかは想定しています。ただし，どういう人が住んでどういう管理をするかということは抜けています。本日のグループディスカッションの中でそうした話が出ていましたが，全くその通りです。計画当初は，そのことを港北ニュータウン憲章としてまとめようとしていましたが，結果としてはまとめきりませんでした。

ただ最初にグリーンマトリックスを考えたときに思ったことは，これは住民参加で考えたことですから，新しく入ってくる人たちに憲章を見せて，こんな風に管理をしたいと思っています。それにご賛成でしたらどうぞ入居してくださいということを確認した上で入居する街にしたいということでした。当時はできませんでしたが，今日のこの会議がそのための第一歩になると感じ，たいへん感激しました。

2

我々も台湾で同じようなことをやっていますが，今日の会議を見て，私たちにも非常に利用できるところがあると思いました。

また，企画の面では全然港北ニュータウンに住んでいない人が，急に来て住民と話をするのはたいへん難しいと感じました。

コミュニティの交流はある特定の地域の課題として考える必要があり，まさに地域の課題であるグリーンマトリックスやタウンセンターの話をとおして議論していけば，もっと交流できるのではないかとの指摘がありました。大変，的を射た意見だと思います。今日の会議を一つの契機として，今後地元で今日のような会を設けて交流を進めていったら，議論の中で出たいろいろな問題が解決できるのではないかと思います。

3

今日の議論を聞いて，いくつか提案したいと思います。１つは，せっかくグリーンマトリックスがあり，個々の家や屋敷林を持っていますので，ぜひいろいろな形で使い込んでほしいと思います。私は関西で園芸療法研究会というのを作り，今年の春頃から病院や福祉関係の施設などに園芸療法の出前をしています。これはたいへん評判がいいのですが，皆さんもいろいろと仕掛けられたらいいと思います。苦情も出るかもしれませんが，苦情を言った人とディスカッションするのがコミュニティですから，苦情が出たら苦情を楽しむくらいのつもりでやってほしいと思います。切った木の枝で何かを作るだけでなく，作ったものはコミュニティの人と人をつなぐメディアですから，それを贈ったりということが会話を広げて行くわけです。グリーンマトリックスの中にある緑を管理するということ，成果物を楽しむということと，成果物をコミュニティの交流メディアとして使っていくこと等いろいろできると思います。

それから，通り単位できれいな道をつくり，みんなで表彰しあうということもできると思います。１週間にせめて１～２回は自分のお気に入りの通りを歩かないと何となく住んでる気がしない，そういった道が住んでいる個々の人の中に１～２本できあがった時には，その街はその人にとって“ふるさと”と呼べる街になるのではないかと思います。

コメンテーターによる総括

4　池田　武文（横浜市都筑区長）
5　林　　泰義（千葉大学客員教授）

4

港北ニュータウンの特徴でもある“グリーンマトリックス”が，市民の皆様によって維持管理され，日常生活の中で楽しく利用されるものになることを，行政としてもいろいろな形で支援できたらと考えています。

まちの魅力づくりについては，グリーンマトリックスが生活の中に定着するとともに，もう一方で商店と消費者である区民とがイベント等も含めて交流していくことにより，新しい生活のスタイルができ，これがニュータウンの文化になっていくのだと思います。こうした新しい文化と旧来の伝統的な文化とが融合することによって，今後，都筑区らしい味わいのある街と文化ができてくると思います。

5

今日は都筑区にお住まいの方と，広く各地域から中には台湾のように海外から来た方を含めて議論しました。

各地域からの方々にとって，今日の議論は地域に帰ってからも議論の参考になることがたくさん含まれていたと思います。

今日の会議では，「コミュニティがあらゆる意味でのまちづくりの基礎である」，「中身の交流連携というのは非常に重要なテーマである」，「そのための交流の場や機会をどうしつらえるかというのが非常に重要なテーマになる」ということ，特に市民のまちづくり活動の中では，「いかに使いこなしていくのか」「管理の問題，日常の問題が非常に大きなテーマである」「もっと良くしたいというアクションをどういうふうに考え出していくか」「これらの問題を支える制度についても市民が考える必要がある」といったことが主に議論されました。これらのことは，それぞれの地域の議論でもくりかえし出てくる共通のテーマが抽出されていると考えてよいと思います。

抽象度が高くなりますが，大ぐくりすると「人間（じんかん）・空間・時間・情報の共有」というようにまとめられるのかもしれません。

また，この地域にお住まいの方にとっては，今日は行政がしつらえた機会ですが，これを活かして，テーマコミュニティと地域コミュニティの協力という日頃の関係を，さらに密度を高めていくことができれば良かったと思います。

最後に付け加えれば，今回は実現しませんでしたが，次のこういう機会には市民と行政が一緒になって企画を考えるということが非常に重要だと思います。そうすれば納得のできるテーマ設定ができて，そのテーマで議論をするということが可能になるのではないでしょうか。そうしたあたりがうまく展開できるかどうかは，次の非常に大きい課題です。

昨日の分科会でも海外の方を交え議論しましたが，海外では住民の参加であるとか住民が一緒に考えるといったしくみが非常に進んでいて，日本との差が危機的なほど大きくなっているというのが実感です。行政自身が，いかに構造的な変革ができるかという非常に大きな問題が問われるようになっているということだと思います。これは行政だけでは変えられません。市民もこの問題をどうしたらいいのか，一緒に考えながら変えていくようにアクションを起こさないといけない状況だと思います。ですから，次回には最初から企画を一緒に考えようじゃないかという形で実現していってほしいというのが私の感想です。

アンケート集計表（集計数：３４）

Ｑ１　このフォーラムを何でお知りになりましたか（複数回答可）

新聞記事	チラシ・ポスター	広報よこはま	知人から	そ の 他	未記入
0	１３	6	4	１１	1

Ｑ２　この地域会議に参加したきっかけは何ですか（複数回答可）

港北ＮＴに興味がある	仕事に関係がある	地域のまちづくりの参考にする	その他	未記入
１６	１１	１１	4	1

Ｑ３　この地域会議についてご感想やご意見をお書きください
地域会議全体についてどうでしたか

とても良い	良い	普通	あまり良くない	良くない	その他	未記入
7	２０	6	0	0	0	1

その他ご意見・ご感想をお書きください

いろいろな意見が出されましたが，一番多かったのは「時間に余裕がないので，討論の時間をもっとふやして欲しい」という内容でした。その他ではいろいろな意味で「有意義だった」という趣旨のもの，「林先生のまとめが良かった」というものがあった反面，「寒さ対策が必要」，「意外性がない」，「外部からの参加者には現状の説明が不十分」，「次にどのようにつなげるのかわからない」など厳しい意見もありました。

Ｑ４　その他何でも結構ですので，ご意見・ご感想をお書きください

もっとも多かったのは，「市民参加でこのような会議，催しを続けて欲しい」というものでした。その他「託児サービスが良かったことを伝えて欲しい」，「地元の人の参加が少なかったが，今後は地元組織が重要になる」，「新旧住民の融合が必要」，「今日出た意見を具体的に活かして欲しい」などの意見が寄せられました。

Ｑ５

性別	男性	女性	未記入
	２５	8	1

住所	区内	市内	市外	未記入
	9	１０	１３	2

職業	会社員	学生	研究者等	公務員	主婦	自営業	団体職員	その他
	１１	8	2	5	1	1	2	4

年齢	１０代	２０代	３０代	４０代	５０代	６０代	未記入
	1	１２	5	7	5	2	2

閉会セッション　地域会議の報告

岩村　和夫（武蔵工業大学教授）

午前中はタウンセンター地区とグリーンマトリックスシステムの現状とそこでの活動等について市民の方々が説明をしました。

午後は，住民参加や全面買収方式とは違う街づくりによる熟成の仕方等が港北ニュータウンの特徴ということと，地域での大学のあり方も含め，住民がどういう意識を持ちながら暮らしているか等について基調報告がありました。

次に地域の活動報告という内容で，様々な日常の問題等を核にしてできあがった市民活動の中からテーマを３つに絞って，９名の方から報告がありました。

そして，そのテーマごとにグループディスカッションが行われました。グループディスカッションの結果，でてきたキーワードを持ち寄って，全体会議で整理し，最後に３つの言葉に結晶化されました。

１　まちを積極的に使いこなす企画・しくみ・活動

グリーンマトリックスは，管理運営が非常に大きな問題です。実際，犯罪等が発生していますが，それを防止するために規制するのではなく，使い込んでいく，その過程で，より当初計画でイメージしたような緑なり緑道に変わっていくのだろうという意見がありました。

新・旧住民の接点として都市農業を積極的に利用するという提案がありました。

２　交流の場・機会の創出，情報の共有

人間・空間・時間・情報を触媒として，タコツボ的に行われている市民活動をつないでいくサービスのあり方や街の姿が問われてくるという意見や，テーマ型コミュニティの多くは女性が非常に力を発揮していますが，それと地域コミュニティ・企業や商店等との協力関係が必要になってくるという意見がありました。

市民側から，地域拠点となるような様々なサービスや場が，住民参画の中で絶対必要なんだという意見が強くでました。

時間環境の多様化・高速化に対応した仕掛けと仕組み。これは現代社会の大きな特徴ですが，港北ニュータウンのように非常に属性の違う人が外から住み始めたところでは，様々な時間環境に対して，コンピューターネットワークや大学等の活用によって街がどう応えていくのかが，非常に大きなテーマであるという意見がありました。

３　持続的なまちづくりを支えるエネルギーと動機づくり

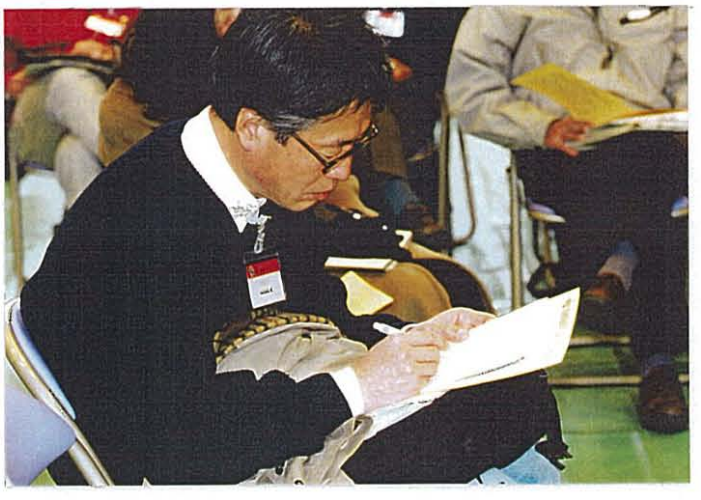
市民活動を続けてきた人たちが，これからも継続するためには動機づけが必要です。そのためには自分たちがやってきた活動の意味づけ，後付けといったものが，第三者からなされるということが，大事であるという意見が出ました。それが特に印象に残りました。

女性のイニシアティブが市民活動を支えているという側面がありますが，それに対して，行政や他の諸団体等がどう支えていけるのかという問題提起がありました。

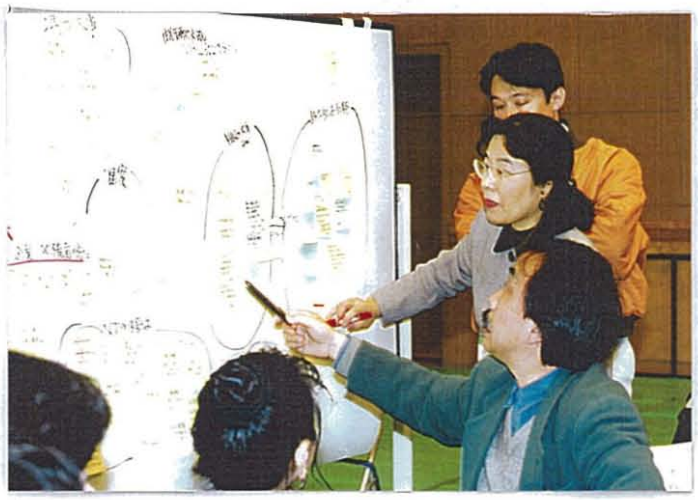
いずれにせよ，これまで行われてきた様々な市民活動が，より高次な段階に進むための仕組みやシステムがこの街に求められていることが良く理解されました。

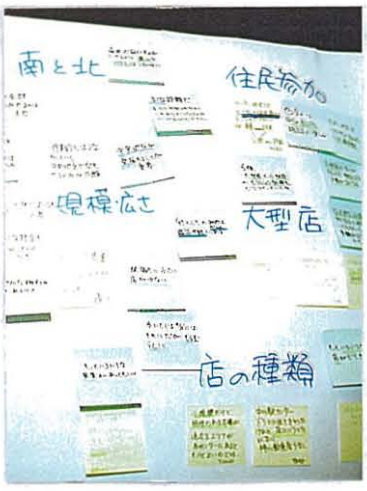
今回の地域会議は，お互いのタコツボ的な状況から，全体像をみんなで理解しあう場とそれから情報を共有する場であったと思いますが，さらに，今回のような場が，これからも是非必要ということで，すべての参加者たちの共有認識が得られました。

ヨコハマ都市デザインフォーラム The 2nd YOKOHAMA URBAN DESIGN FORUM
③ 都筑区
タウン地区)
n ③ Tsuzuki Ward,
u New Town Area
郊外部の持続的まちづくりを考える
Sustainable Urban Development in Suburban Areas



この街はこうしてできた
~3回連続講演会~港北ニュータウン事業のあゆみ~




南と北
住民協力
規模・広さ
大型店
店の種類

第2回
ヨコハマ都市デザインフォーラム
YOKOHAMA URBAN DESIGN FORUM

地域会議・都筑区「港北ニュータウン地区」

本日の会議の流れ

現地視察　センター南　鴨池公園　武蔵工業大学

地域会議　（武蔵工業大学環境情報学部　体育館）　都筑区長　／　学部長挨拶

① 基調講演

★成熟期のニュータウン　高見沢　実（横浜国立大学助教授）
★港北ニュータウンの生活者意識　岩村　和夫（武蔵工業大学教授）

② 市民活動報告

進行・コーディネーター　林　泰義（千葉大学客員教授）
★９人の方々に次の３つの分野に関する活動について報告していただきます。

A タウンセンター　B グリーンマトリックス　C コミュニティー

休　憩（約１０分間）・**座席の移動**

③ グループ別討議

（大きく３つのテーマを６つのグループに分かれて議論します。）

Aグループ「テーマ：タウンセンターの魅力づくり」
- Ａ－１グループ　司会：小坂　宏（芝浦工業大学助教授）
- Ａ－２グループ　司会：高見沢　実（横浜国立大学助教授）

Bグループ「テーマ：グリーンマトリックスの成長管理と市民活動」
- Ｂ－１グループ　司会：小堀　洋美（武蔵工業大学助教授）
- Ｂ－２グループ　司会：野田　正彰（京都造形芸術大学教授）

Cグループ「テーマ：コミュニティー形成に向けたネットワーク」
- Ｃ－１グループ　司会：福富　洋一郎（早渕川をかなでる会）
- Ｃ－２グループ　司会：岩村　和夫　（武蔵工業大学教授）

休　憩（約１０分間）・**座席の移動**

④ グループ毎の討議結果報告

⑤ 全員で総括討議

⑥ コメンテーターによる総括

コメンテーター　林　泰義　／　池田武文都筑区長　／　川手昭二　他

※ 地域会議の会場内壁面に，市民活動や港北ニュータウンの「パネル展」を開催しておりますので，受付をお早めに済まされ，会議の前に是非ご覧いただきたいと思います。

注）会場内はすべて「禁煙」となっておりますので，指定の場所以外での喫煙はご遠慮下さい。

基　調　報　告

1．成熟期のニュータウン　　横浜国立大学助教授　高見沢　実

1　ニュータウンのつくり方と成熟期の迎え方

・全面買収方式　：　多摩ニュータウン

・土地区画整理事業方式　：　港北ニュータウン

・（参考）レッチワース田園都市の場合

2　港北ニュータウンにおけるまちづくり主体

・初動期　：　地元（地権者），横浜市，公団

・近年の変化　：　住民の急増，都筑区の誕生

3　成熟期の港北ニュータウンの課題

・古くからの住民・新しい住民が参画するまちづくりへ

・基盤整備から都市環境の整備・保全・管理へ

・多様な主体・世代の協力・共存へ

2．港北ニュータウンの生活者意識　　武蔵工業大学教授　岩村　和夫

1　グループインタビュー方式による生活者意識の発見

2　港北ニュータウンにおける典型的な属性別生活者プロフィール

3　まちの物理的環境と，生活者の意識・行動パターンとの関係性

4　予定調和的なまちづくり像と，変化し続ける住民の意識及び生活シーンとの“ズレ”

5　生活者意識・行動の発見から見える，熟成過程のニュータウンの課題

報 告 の 概 要

報 告 者	プロフィール・活動概要	現在の問題及び関心	活動の方向	参加グループ
金子 三千男	・センター南商業地区振興会会長，30 代の青年層リーダーとして当初より区画整理事業に参画 ・事業の歴史を詳細に記録	・住民参加（申し出換地，基盤整備）の実績の継承 ・共同化事業の推進 ・出店者も含めたまちづくりの活性化	・まちづくり活動の日常化（クリーンタウン） ・タウンセンターの名物になるイベントの開催	A-1
徳江 義治	・タウンセンター街づくり協定運営委員会事務局長 ・東急田園都市のまちづくりにも係わる	・街づくり協定（自主協定）の利点と問題点	・地区計画，助成制度の導入	A-2
遠藤 英男	・港北東急百貨店店長 ・タウンセンター共同化事業のパートナー	・出店のねらい半年間の状況 ・港北ニュータウンの特徴	・商業振興会活動への期待 ・港北ニュータウンの魅力づくり	A-1
田中 孝長	・仲町台商業振興会会長 ・ニュータウン内に３店舗経営 ・夏祭り，防犯活動等の企画運営	・商業者から見たまちづくりの実践 ・新住民との連携 ・地区の特徴づくり	・タウンセンターにぎわい成熟プランを市民参加で	A-2
中島 博	・荏田東第１小学校 PTA 会長 ・青少年指導員渋沢地区会長	・スクールゾーン（通学路）の安全確保 ・歩行者専用道路等の利用実態と問題点	・通学路の定期安全点検から地域連携による環境改善へ ・やすらぎ空間のルールづくり	B-2
戸塚 洋一	・港北ニュータウン緑の会 ・鴨池公園愛護会 ・けやきが丘森林愛護会	・団地内保存緑地の管理から市民参加による公園の管理へ ・緑地の育成ノウハウと労力と資金	・緑地保全・育成活動の市民ネットワーク ・ＮＰＯの発足	B-1
男全 冨雄	・第一共同開発社長 ・北山田町内会会長 ・「望郷，失われた故郷の記録」執筆	・ふるさとの歴史の伝承 ・日常的な町内会活動への参画を	・世代を越えたコミュニケーション ・「誰もが新住民」	C-1
山田 美千子	・都筑イベント倶楽部会長 ・荏田南連合自治会広報担当	・横断的文化イベントの実施 ・町内会との連携	・都筑区における新たな文化の創造 ・多様なまちづくりグループとの連携	C-2
常楽 弘明	・ホームページ「緑の小径」を開設 ・区内の地域活動等を紹介し，同世代（30 歳代）住民とのネットワークを形成	・港北ニュータウンを中心とした住民間の交流	・インターネットを活用したまちづくりの情報の交換	C-1

グループ討議

活動の報告者，コメンテーター，参加者がテーマごとのグループに分かれ，議論します。休憩時間中に，グループ討議で議論したい論点，意見等をポストイットに書いて，各グループのボードに貼りつけてください。

Aグループ：タウンセンターの魅力づくり

横浜市北部の副都心として百万人商圏を目指して発展しつつあるタウンセンターは，港北ニュータウン計画の特徴のひとつ。地区面積 73ha は新宿副都心に匹敵する。

駅前の都市緑地を核とした歩行者空間ネットワークにより，歴史資産，緑と水空間を積極的に結びつけた公共空間整備と，地権者による街づくり協定によって，基盤と建物が調和した都市景観を創り出しており，今年「都市景観１００選」に選定された。

これらの整備を可能にした基盤整備事業のしくみと地権者の参画の過程を明らかにするとともに，現在の実態を多角的に評価し，ソフトとハードが連携したタウンセンターの魅力あるまちづくりについて考えます。

「キーワード」

・申し出換地　・マスタープランの見直し　・共同化義務街区　・歴史と水と緑
・街づくり協定　・共同化事業　・核店舗誘致　・業務核都市
・市民の生活意識　・区民祭り　・空閑地利用
・タウンマネージメント　・シティーメンテナンス　・地区計画，都市デザインプラン

Bグループ：グリーンマトリックスの育成管理と市民活動

港北ニュータウン計画の基本方針である「ふるさとをしのばせるまちづくり」「緑の環境を最大限に保存するまちづくり」を具体化したオープンスペースであるグリーンマトリックス。公園緑地面積 122ha，民有地保存緑地 34ha は開発面積の約 12 %を占める。これらの緑地は，かって里山として人々の生活の中にあって大切に管理され，多様な生物が生息していた。今，この資産を受け継ぎ新たな市民生活にどう取り入れ育成してゆくか，様々な取り組みが開始されている。

グリーンマトリックス計画のプロセスを振り返るとともに，現在の利用実態，問題点を把握し,都市の中の身近な自然を日常生活に活かす仕組みと仕掛けについて考えます。

「キーワード」

・防災空間　・基盤整備→基幹整備→施設整備　・ルーズな空間　・生物棲息環境
・日常的な楽しみ，遊び　・私有地の管理から公園管理へ　・愛護会と町内会
・安全性の問題　・安全点検から育成管理へ　・行政と市民の役割分担，協働
・小さなプロジェクトのネットワーク　・育成ノウハウと労力と資金　・ＮＰＯ

Cグループ：コミュニティの形成に向けたネットワーク

都筑区（港北ニュータウン地区）は現在，都市基盤はほぼ整備され，まちの熟成に向けた新たな段階を迎えている。区内では昨年１年間で，主に社会増により約７％の人口が増加した。一方で，区としての歴史が浅く，居住歴の短い区民が多いことから，区民相互のコミュニケーションの確立も課題である。

現在，多様な場面で活発に行われている区民の活動を紹介するとともに，新しい地域コミュニティの形成に向けたネットワークづくりの方向性を考えます。

「キーワード」

・心の通じ合う街は皆の願い　・皆で育てるコミュニティ　・居住歴の短い住民同士のネットワーク　・古くからの住民と転入住民の相互理解　・町内会の役割　・近所づきあいの技術　・ミニコミ，ホームページ，イベント＝コミュニケーションの土俵　・イベントが育てる人の輪（盆踊り，運動会，区民まつりの模擬店）・違いを前提としたコミュニケーション　・重層的コミュニティの形成　・多様な住民組織との共存，連携
・街づくりファンド　・プロセスの重視